

## 社会構築主義におけるOG問題とリベンジ嘘つきのパラドクスとの対応関係

その他のタイトル	The correspondence of ontological gerrymandering to Revenge of the liar paradox
著者	溝口 佑爾
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	49
号	2
ページ	141-160
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/13358">http://hdl.handle.net/10112/13358</a>

## 社会構築主義における OG 問題と リベンジ嘘つきのパラドクスとの対応関係

溝口 佑爾

### The correspondence of ontological gerrymandering to Revenge of the liar paradox

Yuji MIZOGUCHI

#### Abstract

This paper aims to show the correspondence of series of studies on ontological gerrymandering to studies on “revenge of the liar” by introduction of “revenge OG.” “Revenge OG” sorts out the future points for discussion on ontological gerrymandering.

Keywords: Social constructionism, Ontological gerrymandering, Liar paradox, Revenge Liar

#### 秒 録

本稿では、嘘つきのパラドクスを巡る「リベンジ嘘つきのパラドクス」の議論を踏まえ、「リベンジ OG」という補助線を取り出すことで OG 問題と嘘つきのパラドクスの対応関係を指摘する。この対応関係を踏まえることで OG 問題を巡る議論の地平を捉えなおすことができる。

キーワード：社会構築主義、OG 問題、嘘つきのパラドクス、リベンジ嘘つき

## 0. はじめに

本稿では社会構築主義に関する存在論的ごまかし ontological gerrymandering の問題（以下 OG 問題）を巡る議論と嘘つきのパラドクスを巡る議論に対応関係が認められることを指摘する。クレイム申し立て活動に照準することを宣言したジョン・キツセラの社会問題研究に代表されるような社会構築主義 social constructionism<sup>1)</sup> の流行が終息して久しい。とはいえ、社会構築主義は社会学における経験的研究のプログラムとして、社会問題研究の

---

1) 本稿においては、social constructionism の訳語としての社会構築主義と社会構成主義とを区別せずに扱う。両者の系譜学的な違いに関しては（千田 2001）を参照のこと。

範囲にとどまらず様々な領域に応用され展開されてきた。

しかし、根本的な問題として提起されたOG問題については、その決着は未だについていない。それにもかかわらず社会構築主義的な発想が社会学の1つの基礎として据えられ、OG問題は半ば無害化されたものとして棚上げされている状態が続いている（小宮 2017）。

本稿の目的は、嘘つきのパラドクスを巡る議論（特にエピメデスのパラドクスとの同型性）を指摘することを通じて、社会構築主義に対するOG問題を巡る議論の再整理を行い、社会構築主義を巡る理論的な考察に関する現在の見取り図を確認することである。

## 1. 社会構築主義におけるOG問題

社会構築主義は、社会問題をクレイム申し立てというコミュニケーションの過程として捉えるアプローチであり、スペクターとキツセ（Spector & Kitsuse 1977）によって提示されたものである。社会構築主義は社会問題という逸脱カテゴリーを脱本質化することによって、また社会学者の営みに孕む権力性を浮き彫りにすることによって、社会学の方法論・認識論を巡る議論へと多大な貢献を成した。

社会構築主義の起源はラベリング理論に求めることができるだろう。「処罰されるすべての行為」として犯罪を定義したデュルケームの犯罪論以来、社会学の主要なテーマの1つが「逸脱」であった。逸脱カテゴリーの社会的な創出過程に注目するそのデュルケームの態度はマートンを経由してH. ベッカーを代表としたラベリング理論の系譜へと受け継がれる。「逸脱行動」や「逸脱者」を実体としてみる機能主義的アプローチを乗り越えようとしたのが、逸脱を「ラベル貼り」というコミュニケーションとみなすラベリング理論という視座であった。しかし、「逸脱的属性の研究者による客観的同定可能性」という実体視を行う外部の基準を残した形での前提に拠っていたため、ラベリング理論は実証主義的な原因論の土俵へと引き戻されることになる（ラベリング論争）。このラベリング理論が抱える難点の克服をラベリング理論の流れの延長上で提示したのが社会構築主義の視座であると言える。エスノメソドロジーから影響を受けたスペクターとキツセは、社会問題を構成するコミュニケーションを「ラベル貼り」ではなく「クレイム申し立て」というコミュニケーション過程であるとする（Spector and Kitsuse 1977）。それ自身とそうでないものを外在的な視角から区別することができないクレイムを元にするすることで、社会構築主義は本質主義への回帰を免れようとした。

例としてプフォールによる「児童虐待の増加」に関する研究を挙げよう（Pfohl 1977）。

「児童虐待の増加」という社会問題にはその言説が意味する実態に対して心理学的な要因あるいは歴史的・時代的な背景を考えるとといったアプローチをとることができるだろう。それに対し構築主義のアプローチでは「児童虐待の増加」は括弧にくくられ、そのようなクレイム（言説）が申し立てられたというコミュニケーションとしてのみ扱われることになる。この視座からは、実際には増加していない「親から子への暴力」が最近になって「児童虐待」という社会問題として「発見」されたためにあたかも社会問題が量的に増加したかのようにクレイム付けられるに至った様子が描き出される。「児童虐待の増加」は構築されたものである、とはこのような事態を指している。構築主義的なアプローチの射程は非常に広く、「児童虐待」以外にも様々な現象を取り扱うことができる<sup>2)</sup>。一時の盛り上がりには比べると現在は下火であるとはいえ、社会構築主義は社会学にとって今でも重要なアプローチであるといえよう。

しかし社会構築主義のそのような姿勢が、逆説的なことに、本質主義へと帰着してしまうという指摘がなされる。それがウールガーとポーラッチが提示した存在論的ごまかし ontological gerrymandering の問題（OG 問題）である（Woolgar & Pawluch 1985）。彼らは、社会問題の同定に際して当事者による言説以外は使用しないとする構築主義者の方法論の背後に特定の恒常的な社会状態が密輸入されていることを指摘し、具体例で検証した。ウールガーとポーラッチに倣い、ここでも児童虐待の例で説明しよう。「児童虐待の増加」の社会問題化を論じるためには、「保護者による児童の殴打」という恒常的な状態があらゆる時代、あらゆる文化を通じて存在することが想定されている<sup>3)</sup>。ある現象の構築性を問うためには、構築されていない状態を密輸入する必要があるのである（Woolgar & Pawluch 1985）。

構築主義は OG 問題を受けて、3つの立場へと分岐する（Holstein and Miller eds. 1993, 中河 1999）。一方の極には OG 問題は不可避であると開き直りして当事者の言説を積極的に承認する「コンテキスト派」の立場（Best 1993）があり、もう一方の極には OG 問題を受けて記述者としての分析者の位置に対する再帰性を自覚的に問題化する「脱構築派」（Troyer (1993) 等）の立場がある。立場は真逆であるものの、これらは OG 問題というジ

---

2) アルコール依存症や喫煙など、社会構築主義の枠組みで研究された事例は枚挙に遑がない。社会構築主義が日本でも幅広く適用されたことを示すには Web 上でキーワード検索を行えば事足りるだろう。「社会構築主義」あるいは「社会構成主義」「social constructionism」をキーワードとした検索をすると、構築性を問われた事象が山のように出てくる。いくつか例を挙げよう。家族、同性愛文化、オナニー、ストーカー、ニート、近代日本における鯨肉食、老人虐待、ジェンダー、ポストモダニズム、人口統計、etc.

3) あるいは、「親から子への暴力」があらゆる時代、あらゆる文化を通じて存在することが想定されている。

レンマを何らかの形で引き受けた立場であると言える。その一方でOG問題を徹底的に回避しようとする立場を取るのが「厳格派」である。厳格派の論者たちは、OG問題を真摯に受け止め、それゆえにこそOG問題を解決するために構築主義の方法論を修正しようとする。

以上に概観したようにOG問題への反応は様々であったが、方法論的な厳密さの観点から言うならば、コンテクスト派や脱構築派はOG問題を解くことなくあいまいなままに取り込んでしまった立場であると評価することが許されるだろう。本報告において注目するのはOG問題に直接向き合い技術的に避けようとした厳格派の立場である。代表的な論としてP.R. イバラとキツセによる議論を取り上げよう。

イバラとキツセは、当事者による構築である第1次的構築と、研究者による分析的・理論的な構築である第2次的構築とを分けることでOG問題を退けようとした(Ibarra & Kitsuse 1993)。科学的な概念化や現象学的な括弧入れなどの「技巧」を凝らすことによって、彼らは後者を前者より高次の論理階層に確保しようとしたのである。

しかし、厳格派の試みは新たな方法論上の難題を引き寄せてしまう。D. ボーゲンとM. リンチは、イバラとキツセによる処方箋が社会学的な専門知識を特権化してしまうことを、そしてその点において構築主義の問題意識に真っ向から対立するものであることを指摘した(Bogen & Lynch 1993)。厳格派による処方箋が示すのは、OG問題の解決可能性であるというよりはむしろその回避の困難である。

OG問題への処方箋として、イバラとキツセによる議論よりも洗練されたものである中河伸俊による議論を取り上げよう。中河によればOG問題は2つのカテゴリに分けられる。ひとつは「社会問題の構築主義アプローチの公準が実際の研究においては破られている」という論点の特定化された命題であるOG1（属性記述におけるOG問題）であり、もうひとつは「(社会学的な)説明・記述という行いには何らかの存在論的な同定が不可避である」という一般的・形而上学的な命題であるOG2（存在記述におけるOG問題）である。中河は、ウールガーとポーラッチが混同しているOG1（属性記述）とOG2（存在記述）とを分けることで、OG問題を疑似問題として退けることが可能であるとした(中河 1999)。再び児童虐待の例で説明しよう。「児童虐待の増加(という現象がある)」の構築性を論じるにあたっては、社会問題のレベルの構築(OG1)と、「子供とはこのようなものである」や「暴力とはしかじかの動作である」という形而上学的な言説のレベルにおける構築(OG2)とを分ける必要がある。必ずOG問題を引き起こす存在記述(OG2)に関しては常識知と見なしてその構築性を問題とせずともよく、属性記述の構築だけを慎重に選び出す(OG1

にだけ気を付ける）ことによって OG 問題に煩わされることなく研究を行うことが可能になるのである。

しかし、北田暁大は中河の処方箋に対して、OG 1 と OG 2 との区別が齟齬をきたすような例外が存在することを指摘する。その例外というのは、「過去の出来事」を分析対象とする歴史的な構築<sup>4)</sup>を問題とする場合である。というのも、歴史的な命題は必ず存在に関する述語「～である」を伴うためだ。歴史的命題に関する構築を問題にする際には、回避すべき OG 2 と直接に向き合わなくてはならないのである<sup>5)</sup>（北田 2003）。

以上の技術的回避策とは違う角度からのアプローチを行うのが、N. ルーマンの「ラディカル構成主義」の視座から OG 問題を捉える馬場靖雄の議論である（馬場 2001）。馬場によれば、OG 問題の議論における〈構築された定義／不変の状態〉という区別そのものが構築されたものなのであり、その意味で OG 問題の議論は構築主義と理論的構図を共有している。馬場はこの構図に対して、現実の二重性を考慮に入れる必要性を説く。彼によれば、構築された区別の一項としての「現実」とは別に、区別によって成立する地平自体の破綻として現れる現実というものがあり、それこそが構築主義が接触すべき現実なのである。

馬場の議論は非常に洗練されたものであるが、やはり問題が残る。馬場は「破綻としての現実」をルーマンの議論の中から輸入した。しかし、〈構築された定義／不変の状態〉という区別について論じていた OG 問題の地平に「破綻としての現実」を輸入することがいかにして正当化され得るのか。OG 問題を巡る議論と「破綻としての現実」の議論とが乖離していることは、馬場の議論に対する中河のコメント（「抽象的すぎて筆者には実際のケースを思い描きにくい」（中河 2001: 20））にも表れている。

以上に概観したように、構築主義に対する OG 問題に正面から向き合う議論として、ウールガーとポーラッチによる OG 問題の指摘とそれに対するイバラとキツセあるいは中河による反論、そしてそれらとは異なった視座で OG 問題を扱う馬場による議論を挙げるこ

4) ここで歴史的構築を問題とする議論として北田が念頭においているのは、「教科書問題」や「従軍慰安婦問題」を代表とする、歴史を書くことの社会的責任を問う議論のことである。

5) 北田はまた、OG1/OG2の区別に対して歴史に関する構築主義が独特の問題を持ち込むことの必然性を、中河の記述を引用することで補強する。中河は、OG1を克服する対症療法を提示した後で、次のように述べた。

研究が歴史社会学（「問題」の言説史）の領域に入ったときに、こうした対応だけで十分かどうか確信はないが、それについては今後の議論に待ちたい。（中河1999: p.319）

北田は、この中河による記述から、歴史に関する構築主義的研究が他の構築主義的研究とは異なる独特の問題性（OG1/OG2の区別の失効）を持っていることを、当の中河自身も察知していたのではないかとする見解を述べている（北田2003: 40）。

とができる。しかし、それぞれに新たな困難を抱えてしまう点、また各論点同士の関係が不明瞭なままに放置されている（特に馬場の議論）点からは、これらの諸議論を整理しなおす必要性があると言えるだろう。

## 2. 嘘つきのパラドクス

本稿で試みるのは、未解決問題たる OG 問題を直接解くことを目指すのではなく、OG 問題がもう 1 つの未解決問題と対応付けられるということである。もう 1 つの未解決問題とは、バートランド・ラッセル以来の論理学や分析哲学での真理論の領域において行われてきた嘘つきのパラドクス (Liar Paradox) 「この文の内容は偽である」に対する回避の試みである。この 2 つの未解決問題には本質的な類似性がある。このことを検討するためには、嘘つきのパラドクスとリベンジ嘘つきを巡る議論の詳細を通じて確認する必要がある。まずは 1 つの文がその文自体について語ることによって生じる嘘つきのパラドクスを巡る既存研究の概観を行う。

### 2-1. 真偽の決定と嘘つきのパラドクス

嘘つきのパラドクスの典型は、次のようなものだ。

(a) : この文 (a) は偽である

この文 (a) がパラドクスを起こしているとはどのような事態を指しているのかを確認するために、まずはパラドクスを引き起こさない例をいくつかあげておこう。次のような 2 つの文を考えてみる。

(b) : 鯨は哺乳類である

(c) : 文 (b) は偽である

文が正しい内容を記述している場合にはその文が真であるといい、誤った内容を記述している場合にはその文が偽であるという。文 (b) に関して、鯨は確かに哺乳類であるのだから、正しいことを述べている。よって文 (b) は真である。一方の文 (c) は、文 (b) の真偽について述べたものである。文 (b) が上の考察から真になることを考えれば、文 (c)

の主張が間違っていることがわかる。よって文 (c) は偽である。以上から、文 (b) と文 (c) の真偽は、前者が真、後者が偽と定まる。

次にあげるのは、3つの文がそろって初めて、真偽を定められる例である。

(d) : 文 (e) は偽である

(e) : 文 (f) は真である

(f) : マイケル・ジャクソンは2010年まで生きた

まず、文 (d) の真偽を定めるためには、文 (e) の真偽を参照しなければならない。しかし文 (e) の真偽は文 (f) の真偽を参照しなければ定まらないので、まずは文 (f) の真偽を判定する必要がある。文 (f) に関して、マイケル・ジャクソンが生きたのは2009年までなのだから、文 (f) は誤った内容を述べている。よって文 (f) は偽である。文 (f) が偽であったので、文 (e) は誤った内容を述べていることになる。よって文 (e) も偽である。文 (e) が偽であるので、文 (d) は正しい内容を述べていることになる。よって文 (d) は真である。以上から、これらの文の真偽は、文 (d) が真、文 (e) が偽、文 (f) が偽と定まる。

先の2つの例では文 (b) や文 (f) という出発点が存在した。そのため、出発点から参照していくことで真偽を順に定めることができた。それでは、出発点がない例ではどうか。次の3つの文は相互に参照しあっており、まだどの文の真偽もその文だけでは確定しない。

(g) : 文 (h) と文 (i) は、両方とも真である

(h) : 文 (g) は真である

(i) : 文 (g) は偽である

この例では、全ての文が循環的に参照しあっているため場合分けが必要となる。文 (g) が真の場合、文 (g) が偽の場合の順に考えよう。

- 1 文 (g) が真の場合を考える。このとき文 (g) の内容より、文 (h) と文 (i) は両方とも真であることになる。一方、文 (g) が真であることは文 (h) の内容を満たし文 (i) の内容に反するので、文 (h) は真、文 (i) は偽となる。よってこの場合、文 (i) が真でありかつ偽でもあることになるため矛盾。



- 2 文 (g) が偽の場合を考える。このとき文 (g) の内容より、文 (h) と文 (i) の少なくとも1つが偽であることになる。一方、文 (g) が偽であることは文 (h) の内容に反し、文 (i) の内容を満たすので、文 (h) は偽、文 (i) は真となる。文 (h) が偽で文 (i) が真となることは、文 (h) と文 (i) の少なくとも1つが偽であることと矛盾しない。よって、文 (g) が偽、文 (h) が偽、文 (i) が真であることが上記の相互参照文の答えとなる。

以上から、上記の相互参照文の答えは文 (g) が偽、文 (h) が偽、文 (i) が真と決まる。このように、それ自体で真偽が求まらない文が相互参照している場合には、それぞれの文の真偽を場合分けし<sup>6)</sup>、その中から与えられた相互参照文を同時に満たす組み合わせを解とすることになる。

ここまでは答えが求まる例を挙げてきた。しかし、答えが求まらない例も存在する。次の2つの文を考えよう。

(j) : 文 (k) は真である

(k) : 文 (j) は偽である

この2つの文も相互に参照しあっているため、文 (j) の真偽による場合分けを行う。

- 1 文 (j) が真の場合を考える。このとき文 (j) の内容より、文 (k) は真となる。一方で文 (j) が真であることは文 (k) の内容に反するので、文 (k) は偽となる。よって、文 (j) が真かつ偽であることになるので矛盾。
- 2 文 (j) が偽の場合を考える。このとき文 (j) の内容より、文 (k) は偽となる。一方で文 (j) が偽であることは文 (k) の内容を満たすので、文 (k) は真となる。よって、文 (j) が偽かつ真であることになるので矛盾。

このように、いずれの場合にも矛盾が帰結されてしまう。よって、文 (j) と文 (k) を同時に満たす真偽の組み合わせは存在しない。つまり、文 (j) と文 (k) はパラドクスを引

---

6) 文が  $n$  個あるときには、可能な真偽の組み合わせは最大で  $2^n$  通りになる。この  $2^n$  通りの組み合わせのなかに適合する組み合わせがあればそれが答えとなるが、必ずしも答えが存在するとは限らない。次に挙げる文 (j) と文 (k) は、答えがない例である。

き起こしている。パラドクスとは、このように真偽が定まらずに矛盾した解しか存在しない状況に与えられる表現である。

以上の準備を経て、節冒頭の自己言及的な文 (a) がパラドクスを引き起こすことを確かめよう。

(a) : この文 (a) は偽である

この文 (a) は当の文自身を参照しているので、文 (a) の真偽による場合分けを行う。

- 1 文 (a) が真であるとする。このとき、文 (a) の意味から、文 (a) は偽となる。よって文 (a) は真ではない。以上から、文 (a) は真かつ真ではないことになるので矛盾。
- 2 文 (a) が偽であるとする。このことは、文 (a) の意味を満たすので、文 (a) は真となる。よって文 (a) は偽ではない。以上から、文 (a) は偽かつ偽ではないことになるので矛盾。

どちらの場合にも矛盾が帰結され、文 (a) の真偽は定まらない。文 (a) が引き起こすパラドクスとはこのような事態のことを指している。

## 2-2. 嘘つきのパラドクスへの処方箋とリベンジ嘘つき

次に、嘘つきのパラドクスを克服するために真理論において行われた取り組みを概観し、さらにその取り組みへの再反論を取り上げる。重要なことは、自己言及というパラドクスから出発することへの志向が、自己言及を擬似問題として回避しようとする試みを通じてむしろ強化されてしまうことである。

嘘つきのパラドクスに対する解決策の代表が、A. タルスキによる言語階層説 (hierarchy theory of language) である (Tarski 1944)。

言語階層説では、対象言語とメタ言語とを分離する。対象となる言語がその言語自身の真偽について述語をもつことが嘘つきのパラドクスを招く原因であると捉えることである。対象言語の真偽について語ることのできる言語を階層的に上位のメタ言語として用意する。

タルスキに倣い、対象言語が属する階層を  $L_0$ 、メタ言語が属する階層を  $L_1$  と名付けよう。

ただし、対象言語  $L_0$  とメタ言語  $L_1$  を分けるだけでは嘘つきのパラドクスを避けることはできない。というのも、この段階ではメタ言語  $L_1$  の水準で嘘つきのパラドクスを出現させる余地が残っているからである。そこで  $L_1$  についても、それについて語るさらにメタな言語  $L_2$  を考える必要が生じる。同様にして言語全体を、対象言語  $L_0$ 、 $L_0$  に対するメタ言語  $L_1$ 、 $L_1$  に対するメタ言語  $L_2$ 、 $L_2$  に対するメタ言語  $L_3$  というように階層化することが必要となる。このように、言語の中に階層  $L_0, L_1, L_2, L_3, L_4, \dots$  を持ち込むことによって嘘つきのパラドクスが発生する条件を避けようとするのがタルスキによる言語階層説の方針である。

タルスキによるこの解決案は、それによって嘘つきのパラドクスの問題が解決済みであると考えられた時期もあったほどに説得的なものであった。しかし、言語階層説は嘘つきのパラドクスの解決として十分ではない。前節であげた文 (j) と文 (k) のように、直接的な自己言及を含む文を避けたとしても、嘘つきのパラドクスと同様のパラドクスを引き起こす文を作ることができるからである。

(j) : 文 (k) は真である

(k) : 文 (j) は偽である

この2つの文に起こるパラドクスは階層を整備したとしても避けることができない。文 (j) と文 (k) が相互に参照し合っているため、言語の階層を決定することができないからである。例えば、文 (j) が  $L_1$  に属するとしよう。そのとき、文 (j) について語る文 (k) は、1段階メタな言語  $L_2$  に属する言語であることになる。しかし、そうであるとすれば、文 (k) について語る文 (j) は、さらに1段階メタな  $L_3$  に属することになる。こうして、文 (j) と文 (k) に関しては、語る言語が語られる言語よりも高次のものであるとするタルスキの言語階層説は通用しなくなる。同様にして嘘つきのパラドクスを持ち込むような例は、いくらかでも言語階層説の内部に作り出すことができる<sup>7)</sup>。

続けて、S.A. クリプキによる嘘つきのパラドクスの解決策を概観しよう。上記のような観点からタルスキの言語階層説を批判したクリプキは、嘘つきのパラドクスの階層化によらない解決を試みた (Kripke 1975)。クリプキの方針は、パラドクスを起こす文とそうで

7) 既存研究におけるタルスキの解決案へのもう1つの反論もあげておこう。それは、直接の自己言及文を回避するタルスキの解決が強すぎるというものである。例えば、次の文 (l) は、直接の自己言及文ではあるもののパラドクスを引き起こさない。しかし、タルスキの解決案はこのような明らかに無害な文も回避してしまう。

(l) : この文 (l) は真である

はない文とを分けるというものである。そのような基準をどのように設けるのか。今一度パラドクスを引き起こす文を引きながら説明しよう。

- (a) : この文 (a) は偽である
- (j) : 文 (k) は真である
- (k) : 文 (j) は偽である

これらの例からわかるのは、パラドクスを起こすのが直接に自己言及している文 (a) だけではないということだ。それ単独では自己言及ではない文 (j) と文 (k) も、組み合わせによっては嘘つきのパラドクスと同様の事態を招くのである。それでは他の文への参照が含まれている文も取り除く必要があるのだろうか。そうではない。既出の例の中から、他の文を参照しているがパラドクスを起こさない例を確認しよう。

- (b) : 鯨は哺乳類である
- (c) : 文 (b) は偽である
  
- (d) : 文 (e) は偽である
- (e) : 文 (f) は真である
- (f) : マイケル・ジャクソンは2010年まで生きた

これらの例がパラドクスに陥らなかった理由は、即自的に真偽の定まる参照の終着点が設定されていたからである。上の例においては文 (c)、そして下の例においては文 (d) が終着点にあたる。そこでクリプキは、文 (a) や文 (j)・文 (k) のような無限に参照が続いていく文に「パラドクシカル」という新たなカテゴリを与え、それによって文 (b) (c) あるいは文 (d) (e) (f) のような真偽を確定できる文と区別する。パラドクスを起こす有害な文を、それ専用のカテゴリへと振り分けることで、無害な文を保護するのである。

このクリプキによる解決策は、タルスキ以降で最も強力なものである（山岡 2001: 117）。しかし、このクリプキによる解決策こそが嘘つきのパラドクスの本質をわかりやすく呼び寄せてしまう。シモンズ（Simmons 1993）と山岡（2001）に従って次の文を考えよう。

- (P) : 文 (P) は偽であるか、または、パラドクシカルである

文 (P) の真偽 (あるいはパラドキシカル) を決定するため、場合分けを行うと次のようになる。

- 1 文 (P) が真であるとする。このとき、文 (P) の意味から、文 (P) は偽であるかパラドキシカルである。よって文 (P) は真ではない。以上から文 (P) は真かつ真ではないことになるので、矛盾。
- 2 文 (P) が偽であるとする。このことは、文 (P) の意味を満たすので、文 (P) は真となる。よって文 (P) は偽ではない。以上から文 (P) は偽かつ偽ではないことになるので、矛盾。
- 3 文 (P) がパラドキシカルであるとする。このことは、文 (P) の意味を満たすので、文 (P) は真となる。以上から文 (P) はパラドキシカルではない。以上から文 (P) はパラドキシカルかつパラドキシカルではないことになるので、矛盾。

以上から、文 (P) は、真でも偽でもパラドキシカルでもないことがわかる。さらに、証明の仕方からもわかる通り、文 (P) はまさしく嘘つきのパラドクスとなっている。文 (P) は、嘘つきのパラドクスを廃棄したはずのクリプキの体系の内部に見出される嘘つきのパラドクスなのである<sup>8)</sup>。

このように、嘘つきのパラドクスの矛盾を避けるための解決策においては、新たな嘘つきのパラドクスが見つかってしまう。この新たな嘘つきのパラドクスは「リベンジ嘘つき (Revenge Liar)」と呼ばれている (Simmons [1993] 2008)。嘘つきのパラドクスに対してはタルスキやクリプキによるもの以外にもさまざまな解決が提言されてきたが、現在までのところリベンジ嘘つきを完全に回避できる方法は見つかっていない<sup>9)</sup> (津留 2005; Simmons [1993] 2008)。

---

8) 既存研究におけるクリプキへのもう1つの反論もあげておこう。先にあげた文 (g)・文 (h)・文 (i) は、参照が無限に続く文であるので、クリプキによる解決案においてはパラドキシカルな文へと分類されてしまう。

(g) : 文 (h) と文 (i) と、両方も真である

(h) : 文 (g) は真である

(i) : 文 (g) は偽である

これらの文には、文 (g) が偽・文 (h) が偽・文 (i) が真という答えが存在するのであった。このように、クリプキの解決案においては、文 (g)・文 (h)・文 (i) のような無害な文までもが排除されてしまう。これは先の注におけるタルスキへの反論と同じ方針に基づくものである。

9) クリプキの解決案だけではなくタルスキの言語階層説に対しても、下記の文 (H) のような1文で表現できるリベンジ嘘つきが存在する (Simmons [1993] 2008)。

(H) : 文 (H) は階層のどのレベルでも真でない

### 2-3. 全称命題に発生するリベンジ

比較的単純な擬似問題と思える嘘つきのパラドクスへの対処が再び嘘つきのパラドクスを招いてしまう「リベンジ嘘つき」について概観した。文 (a) のような明らかな自己参照を行っていない時にも同様の事態は起こり得る。例えば全称「すべての」を用いた次の文もまたリベンジを発生させる。

(a') : すべての文は偽である

文 (a') は嘘つきのパラドクスの初期的なもので、提唱者の名を冠してエピメニデスのパラドクスと呼ばれる<sup>10)</sup>。すべての文には文 (a') 自身も含まれているため、嘘つきのパラドクスと類似の事態を引き起こす。

- 1 文 (a') が真であるとする。このとき、文 (a') の意味から、文 (a') 自身は偽となる。以上から、文 (a') は真かつ真ではないことになるので矛盾。
- 2 文 (a') が偽であるとする。このとき、文 (a') は否定され「真である文が存在する」が真となる。文 (a') 以外に真なる文が存在しない場合には文 (a') の意味を満たすので文 (a') は真となる。文 (a') が偽かつ偽ではないことになるので矛盾。文 (a') 以外に真なる文が存在する場合には文 (a') が偽であることと矛盾しない。

以上から、「文 (a') は偽であるが、文 (a') 以外の真なる文が存在する」という解の可能性は残るものの、文 (a') 単独では偽となるかパラドクスを引き起こすかは決められない。また、何れにせよ文 (a') が真である可能性は否定される。

重要なのはエピメニデスのパラドクスもまたリベンジを引き起こすということである。例えばクリプキの解決案を施した場合には、次のような「リベンジエピメニデス」を作ることができる。

(P') : すべての文は偽であるか、または、パラドシカルである

---

10) ただし、直後に述べるように厳密には解が存在する（文 (a') が偽で、(a') 以外の文の中に真のものが存在する場合）ためパラドクスではない。

### 3. リベンジ嘘つきと「リベンジ OG」: OG 問題を巡る地平の現在

#### 3-1. リベンジ OG

リベンジ嘘つきの議論を踏まえて OG 問題を捉えなおしてみよう。OG 問題の指摘は、構築主義が自己適用に関するパラドクスを孕むことの指摘でもあると考えることができる。対象となる言説（クレーム）の集合についての構築性を問う社会構築主義の主張は、それ自身も1つの言説として提出される限り、自己適用を免れない。しかし、構築主義が結論として申し立てるクレームである「Xは構築された」のXの中に構築主義自身を入れることはできない。というのも、「このクレームは構築された」という嘘つきのパラドクスが生じるからだ。構築主義に孕むこの綻びを別の表現で問題化したものがOG問題であるとみなすことができる。OG問題は、自己適用（自己言及）が起こすパラドクスの一例である点で嘘つきのパラドクスと同じ構造を備えていると言える。

構築主義を巡るOG問題が嘘つきのパラドクスの1つの例であるとするれば、OG問題への回避策が新たな困難を招くことは、嘘つきのパラドクスの回避策が新たな嘘つきのパラドクスを呼ぶ「リベンジ嘘つき」のOG問題版の対応物であると考えることができる。この観点からは、OG問題への回避策が招く新たな困難が、別水準のOG問題に他ならないという視座が得られる。本報告では、このOG問題への処方箋が新たなOG問題を招く事態のことを、「リベンジ嘘つき」に倣って「リベンジOG」と呼びたい。

嘘つきのパラドクスへの処方箋とOG問題への処方箋とを次のように対応付けることができる。OG問題に対するイバラとキツセによる「第1次的構築／第2次的構築」の導入は、嘘つきのパラドクスに対するTarskiの言語階層説に対応する。両者ともに、異なる水準を設ける（階層化する）ことによってパラドクスを回避しようとしたが、その階層という即自的な設定自体にパラドクスが再現されてしまう。そして、中河（1999）の「OG1／OG2」の分離によるOG問題への対処はKripkeによる「パラドクシカル」カテゴリ導入による嘘つきのパラドクスへの対処に対応する。両者ともに、「有害」なカテゴリ（OG2、パラドクシカル）から区別されたところに「無害」化できるカテゴリ（OG1、真／偽）を確保することでパラドクスを回避しようとしたが、その「有害」／「無害」という区別自体にパラドクスが再現されるのである。

#### 3-2. リベンジ OG とリベンジ嘘つき（あるいはリベンジエピメニデス）との対応関係

「リベンジOG」とリベンジ嘘つきとの関係（あるいは「リベンジエピメニデス」との関

係) について、詳細な対応を検討しよう。

スペクターとキツセが主張した社会構築主義は次の主張を含む<sup>11)</sup>。

(a'') : すべての記述は構築されている

しかし (a'') は、前出のエピメニデスのパラドクス (a') から「文」→「記述」、「偽」→「構築されている」と書き換えたものとなっている。

(a') : すべての文は偽である

そのため、同様の議論を用いて問題が発生することを導くことができる。

- 1 (a'') が構築されていないとする。このとき、(a'') の意味から、(a'') 自身は構築されていることになる。以上から、(a'') は構築されており かつ 構築されていないことになるので矛盾。
- 2 (a'') が構築されているとする。このとき、(a'') は否定され構築されていないである記述が存在することとなる。(a'') 以外に構築されていない文が存在しない場合には (a'') の意味を満たすので (a'') は構築されていないことになる。このとき (a'') は構築されており かつ 構築されていないことになるので矛盾。文 (a'') 以外に構築されていない文が存在する場合には (a'') が構築されていると矛盾しない。

イバラとキツセによる「第1次的構築／第2次的構築」の導入は、次の主張 (j'') を含む。

(j'') : 日常的な語りは構築されている

---

11) より厳密には、すべての記述が、それ自身とそうでないものを外在的な視角から区別することができない特性を持つクレームであることを断った上で、次のように表現するべきであろう。

(a''') : すべてのクレームの状態は社会的に構築されている

状態とは「真／偽」「存在／非存在」等を含めた包括的なものであり、真／偽に変わって用いられる。しかし、ここで重要なのは自己否定的な全称命題である点、そのために (a''') 自身が自己適用を免れなければ成立しない「クレーム」である点である。(a''') も (a'') と同様の議論を重ねることができるため、ここではよりわかりやすい (a'') を採用した。



ここで (j<sup>o</sup>) に対し次の語り (k<sup>o</sup>) を追加する。

(k<sup>o</sup>) : (j<sup>o</sup>) は構築されている

しかし (j<sup>o</sup>) と (k<sup>o</sup>) は、前出のタルスキ言語階層説で回避できないパラドクスである (j) と (k) に対応付けることができる。

(j) : 文 (k) は真である

(k) : 文 (j) は偽である

「文 (k)」を少し拡張して「日常的な語り」とし、そして「偽」→「構築されている」と書き換えれば良い。

- 1 (j<sup>o</sup>) は日常的な語りを対象としていることから、日常的な語りではなく高次の語りに属する。高次の語りは日常的な語りには属さず、(j<sup>o</sup>) が示す事柄は構築されてはいないこととなる。
- 2 一方で (k<sup>o</sup>) もまた (j<sup>o</sup>) について語るものであるから、日常的な語りではなく高次の語りに属することになる。高次の語りであればその主張は構築されてはいないため (k<sup>o</sup>) が示す事柄は正しいということとなり、(j<sup>o</sup>) は構築されていることになる。以上から (j<sup>o</sup>) について矛盾が生じる。

このことはイバラとキツセによる処方箋において (k<sup>o</sup>) のような語りが認められていないことを、高次の語りに対するクレームの可能性が排除されていることを示している。これはまさにボーゲンとリンチがイバラとキツセの議論に対して述べていたことと一致する。

中河の処方箋に対しては、クリプキの解決案と対応づけることができる。中河の処方箋には次の主張が含まれる。

(P<sup>o</sup>) : すべての状態は、OG 1 であるか、または、OG 2 である

しかし (P<sup>o</sup>) は、クリプキによる処方箋に対する「リベンジエピメニデス」である (P') と対応づけることができる。

(P') : すべての文は偽であるか、または、パラドクシカルである

中河の処方箋それ自体が、自己適用をまぬがなければならない点で OG を引き起こしたスペクター・キツセの主張と構造的に等価なものとなっており、リベンジ OG そのものと言える。また、OG 1 と OG 2 を区別できない歴史的命題を用いた北田による中河への反論は、OG 1 と OG 2 に分けること自体が引き起こす新たな問題についての指摘であり、形は違えど文 (P') の存在を指摘することに相当すると言える。

社会構築主義の主張自体は嘘つきのパラドクスではなくエピメニデスのパラドクスと同型であるが、命題として捻れており「真」とはならないこと、また一見擬似問題に見えるがアドホックな対応を行おうとすると OG にリベンジされる点で嘘つきのパラドクスと本質的な対応関係にあるといえる<sup>12)</sup>。

### 3-3. OG 問題を巡る議論

「リベンジ OG」という観点を導入することで、OG 問題を巡る議論と嘘つきのパラドクスを巡る議論（厳密にはエピメニデスのパラドクスを巡る議論）が同型の構造を持つていることがわかる。本稿の役割はこれまでの議論で果たされているが、OG 問題を巡る議論と嘘つきのパラドクスを巡る議論との対応関係からわかることをいくつか示しておこう。

「ラディカル構成主義」の視座から OG 問題を扱った馬場の試みは、「リベンジ OG」（OG 問題の発生が不可避であること）の把握のもとで、パラドクスにおける説明の方向を逆転させたものとして論じることができる。OG 問題への処方箋は別水準での OG 問題を招く。そして、その別水準の OG 問題への処方箋もまた、さらなる別水準への OG 問題を招くことになる。この、OG 問題を回避することの困難さ（「リベンジ OG」）の把握のもとで、OG 問題を社会学的な記述の限界（失敗）として捉えるのではなく、むしろその破綻（失敗）を逆に社会学的記述の条件として位置付けることを訴えるのが馬場の論であるとみなすことができる。

また、OG 問題回避策と「リベンジ OG」とが対立する地平と、「リベンジ OG」から出発する馬場の議論との間に 2 つの飛躍を指摘することができる。

1 つは「ヒュームの問題」が指摘するものと同じ飛躍である。「リベンジ OG」から出発

---

12) 本稿では割愛したが、コンテキスト派の議論や、概念分析に着目する最近の議論に対しても同様の仕方ですべて「リベンジ OG」を指摘することができる。アド・ホックな対応はリベンジ OG の餌食となる。

するためには、「リベンジ OG」が一般的に成立する命題であることが必要条件となる。しかし、上で示したことは既存の回避策に関しては OG 問題がリベンジするという点だけである。OG 問題のリベンジが高々有限個示されたとしても、OG 問題あるいは「リベンジ OG」が一般的な命題であることは導けない。ここでは、枚挙的帰納法から全称命題を導く「ヒュームの問題」(Okasha 2002)と同じ飛躍を指摘することができる。

もう1つの飛躍は、「ソリテス・パラドクス<sup>13)</sup>」において起こるのと同じ論点先取である。例え「リベンジ OG」が一般的な命題であり、そのため「現実」が構築によって覆い尽くされてしまったとしても、それは「破綻としての現実」の存在を意味するわけではない。OG 問題を巡る地平に遍在する「破綻としての現実」は、「現実」と「構築」の非対称性を先取的に前提とし、それを個々の操作(個々の OG 問題)に投影することによって成立しているのである。ここでは、導きたい結論を個々の操作へと投影するという、ソリテス・パラドクスにおいて起こるものと同じ論点先取が行われている。

また、馬場の議論を踏まえると、OG 問題に OG 問題を重ねることを解決の可能性として提示することができる。OG 問題と同じ構造を持ったルーマンのメディア論(馬場 2001)を用いてメディアとメディアを重ね合わせた事例である「被災写真」について述べた溝口(2012)に解決の一つの萌芽を見ることができるだろう。

OG 問題のリベンジは強力なものである。しかし、ここで見たように、OG 問題回避策と「リベンジ OG」を巡る対立軸と「リベンジ OG」から出発する議論との間には大きな空隙が存在する。OG 問題に対する未来の処方箋は、この空隙の向こうに見えてくるはずである。

〈参考文献〉

- 赤川学, 2006, 『構築主義を再構築する』勁草書房。  
 赤川学, 2012, 『社会問題の社会学』弘文堂。  
 赤川学, 2017, 「社会問題の歴史社会学をめざして」『社会学評論』68(1): 118-133。  
 馬場靖雄, 2001, 『ルーマンの社会学理論』勁草書房。  
 馬場靖雄, 2001, 「構成と現実/構成という現実」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム: パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版。  
 Best, Joel, 1993, "But Seriously Folks: The Limitations of the Strict Constructionist Interpretation of Social Problems," J.A. Holstein and G. Miller eds., *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter, 129-47.

13) ソリテス・パラドクスについては吉満(2005)を参照。

- Bogen, D. and M. Lynch, 1993, "Do We Need a General Theory of Social Problems?" J. Holstein and G. Miller eds., *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter.
- Hacking, I., 1999, *The Social Construction of What?* Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Holstein, J.A., and G. Miller eds., 1993, *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter.
- Ibarra, P.R. and J.I. Kitsuse, 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems," J. Holstein and G. Miller eds., *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter.
- 木戸功・中河伸俊, 2017, 「特集『社会学と構築主義の現在』」よせて『社会学評論』68 (1): 17-68.
- 北田暁大, 2001a, 「〈構築されざるもの〉の権利をめぐる: 歴史的構築主義と实在論」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房.
- 北田暁大, 2001b, 「歴史の政治学」吉見俊哉編『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』講談社.
- 北田暁大, 2003, 「存在忘却? : 『二つの構築主義』を巡って」『歴史学研究』778, 35-40/62.
- 北田暁大, 2006, 「構築主義と实在論の不可思議な結婚: J・サール『社会的現実の構成』をめぐる」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性: 社会学的方法の迷宮から』東信堂.
- 小宮友根, 2017, 「構築主義と概念分析の社会学」『社会学評論』68 (1): 134-149.
- 溝口佑爾, 2012, 「メディアの生成する場を被災地に見る: 被災写真とルーマンメディア論の交互作用」『社会システム研究』, 京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会, 15: 33-44.
- 中河伸俊, 1999, 「社会問題の社会学: 構築主義アプローチの新展開」世界思想社.
- Pfohl, S.J., 1977, "The 'Discovery' of Child Abuse: A Study in Social Problem Definition," *Social Problems*, 24: 310-323.
- Spector, M.B. and J.I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings.
- Simmons, K., [1993] 2008, *Universality and the Liar: An Essay on Truth and the Diagonal Argument*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 平英美・中河伸俊編, 2006, 『構築主義の社会学: 实在論を超えて』新版, 世界思想社.
- 田中耕一, 2006, 「構築主義論争の帰結: 記述主義の呪縛を解くために」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学: 实在論を超えて』新版, 世界思想社, 214-238.
- Tarski, A., 1944, "The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics," *Philosophical and Phenomenological Research*, 4: 341-376. (=1987, 飯田隆訳, 「真理の意味論的観点と意味論の基礎」坂本百大編『現代哲学基本論文集 II』勁草書房.)
- 戸田山和久, 2000, 『論理学をつくる』名古屋大学出版会.
- Troyer, R., 1993, "Revised Social Constructionism: Traditional Social Science More Than a Postmodern Analysis," *R.S.C.*: 117-128.
- 津留竜馬, 2005, 「嘘つきのパラドクス」飯田隆編『知の教科書 論理の哲学』講談社, 25-57.
- 渡會知子, 2004, 「『構築主義論争』再考: ラディカル構成主義を手がかりに」『ソシオロジ』49 (1): 21-37.
- Weinberg, Darin, 2014, *Contemporary Social Constructionism: Key Themes*, Philadelphia: Temple university Press.
- Woolgar, S. and D. Pawluch, 1985, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations," *Social Problems*, 32 (2): 214-227. (=平英美訳, 2006, 「オントロジカル・ゲリマンダリング: 社会問題を巡る説明の解剖学」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学: 实在論を超えて』新版, 世界思想社, 184-213.)

- 山岡舘郎, 1996,『現代真理論の系譜：ゲーデル、タルスキからクリプキへ』海鳴社.  
山岡悦郎, 2001,『うそつきのパラドックス』海鳴社.  
山下正男, 1983,『論理学史』岩波書店.  
吉満昭宏, 2005,「ソリテス・パラドクス」飯田隆編『知の教科書 論理の哲学』講談社, 59-81.

—2017.12.1受稿—